

ダルマキールティの増益に関する諸語の分類

秦 野 貴 生

1. はじめに

「増益」(samāropa) という概念は古くから仏教論書などで用いられてきた語であり、中観思想では「空」に関する議論、唯識思想では「三性説」に関する議論で多く用いられてきた。⁽¹⁾ その主な意味内容は「存在しないものを誤って存在するものと認識すること」であり、対義としての「存在するものを誤って存在しないものと認識すること」は「損減」(apavāda) と表現される。⁽²⁾

仏教論理学を大成した論師ダルマキールティ (Dharmakīrti, ca. 600-660) もまた samāropa という語を頻繁に用い、先行研究では「増益」や「付託」といった訳語が使用されている。⁽⁴⁾ 一方で彼は apavāda を用いることはあまりなく、そのことから samāropa を中観思想や唯識思想での用法と同様に、「存在しないものを誤って存在するものと認識すること」という内容のみで捉えるべきではないことが想定される。⁽⁵⁾ ダルマキールティは samāropa と類似した語である āropa, adhiropa, adhyāropa という語も用いているが、samāropa とこれらの語との区別については、先行研究で未だ明確にされているとは言えない。⁽⁶⁾ 特に samāropa と āropa に関しては同義のものとして考えられ、これらの語が「思い込み」(adhyavasāya)⁽⁷⁾ の働きとして捉えられえる傾向も見られる。⁽⁸⁾ はたして samāropa をはじめとする類似語は全て同じ内容であり、かつ「思い込み」の働きに関連するものと言えるのであろうか。

本稿では、ダルマキールティの主著である『プラマーナ・ヴァールツティ

カ』(Pramāṇavārtika) 第1章「自己のための推理」(svārthānumāna) に対する自らの注 (Pramāṇavārtikasavṛtti, 以下自注) での用例を中心に検討し, 上述の諸語の区別, および用法を明らかにしていく。用例の検討に際し, 主にチベット語訳でのみ現存するシャーキャブツデイ (Śākyabuddhi, ca. 660-720) の復注 (Pramāṇavārtikaṭīkā) を参照する。また, カルナカゴミン (Kaṛṇakagomin, ca. 9-10c) の復注 (Pramāṇavārtikasavṛttiṭīkā) からシャーキャブツデイのサンスクリットが想定される場合には適時提示していきたい。

2. samāropa, āropa, adhiropa, adhyāropa の使用回数

samāropa は√ ruh を語根とする名詞であるが, ダルマキールティは同語根をもつ āropa, adhiropa, adhyāropa という語も用いている。そして, これらの語の使用はほとんど『プラマーナ・ヴァールツェティカ』の中に見られ, 現存するその他の著作では『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』(Pramāṇaviniścaya) に2例見られるのみである。まずはこれら4つの語の使用回数(動詞など, 名詞でない語形も含む)を『プラマーナ・ヴァールツェティカ』の章ごとにまとめる。

また, 自注での使用は第1章での使用に含めるものとし, アポーハ論が議論される箇所(第1章のうち, 第40偈から第185偈)での使用回数は()に記載した。

～『プラマーナ・ヴァールツェティカ』の各章における各語の使用回数～

	第1章	第2章	第3章	第4章	計
samāropa	33 (22)	1	1	0	35 (22)
āropa	9 (6)	3	7	2	21 (6)
adhiropa	0	0	2	0	2
adhyāropa	1 (1)	1	0	0	2 (1)
計	43 (29)	5	10	2	60 (29)

表からは, 全用例のうち約9割が samāropa もしくは āropa のものであることが見てとれ, 全用例のうちの約半数がアポーハ論について説かれる箇所で見られていることがわかる。adhiropa のみアポーハ論箇所での用例が見られない

ものの、samāropa をはじめとするこれらの語がダルマキールティのアポーハ論と関連深い語であると考えられる。したがって、アポーハ論箇所でのそれぞれの語の用例を検討することにより、その用法の概観を明らかにすることができるだろう。

また、『プラマーナ・ヴァールツティカ』は第1章に対する自注以外はすべて偈文形式で書かれており、sam や adhi などの接頭辞が韻律の都合により省略される可能性も否めない。第2章以降では常に āropa の使用が最も多いこともこれに起因するだろう。よって、アポーハ論箇所、特にその自注部分を考察することが本論では最も厳密な結果を得られる方法と言え、アポーハ論箇所の考察により得られた各語の用法が、他の章などの偈文箇所でも適用されるのかどうかについては最小限の言及にとどめることとしたい。

3. 各語の用法

増益に関する諸語である samāropa, āropa, adhyāropa, adhiropa の用法を、アポーハ論箇所における用例を中心に確認していく。その訳語についても適宜検討を加えていきたい。

3.1 貝と銀の用例

本稿 2. でまとめた表の通り、samāropa の使用回数は諸語の中で最も多い。そして、アポーハ論箇所における samāropa の代表的な例として、貝 (śukti) を銀 (rajata) と見間違えるというものがあげられる⁽¹⁰⁾。貝と銀の例の場合、実際にそこに「銀」は存在しないため、その意味では「存在しないものを誤って存在するものと認識すること」という内容にも沿い、「増益」という訳語にも適合するであろう。つまり、「貝」に対して誤って「銀」を増益するのである。

この貝と銀の例では、ある X に対して X とは異なる Y の形象を与えることとして増益が述べられるが、増益と確定 (niścaya) との関係について、samāropa と āropa の両語によってダルマキールティは次のように規定している。

PV 1.49:

niścayāropamanasor bādhyabādhakabhāvataḥ /
samāropaviveke 'sya pravṛttir iti gamyate /⁽¹¹⁾

確定の知と増益の知は、排斥されるものと排斥するものの関係にあるため、増益を欠くところにおいてこの〔確定知〕は働く、と理解される。

確定の知と増益の知は互いを否定する関係にあるということがダルマキールティによって説かれている。ここでの確定とは「あるものXに対し誤りなく形象Xを与えること」⁽¹²⁾であり、増益とは「あるものXに対して誤ってYの形象を与えること」を指している。つまり、自注でのダルマキールティの規定では、単にあるものにあるものの形象を与えるのではなく、貝に対する銀のように、異なった形象を与えることのみが「増益」と呼ばれる。また、「排斥し合う関係」(bādhyabādhakabhāva) という表現からは、確定があるときには増益はなく、増益があるときには確定がないことが示されている。ある増益を排除すること⁽¹³⁾などによって確定知は存在し、両者がともに存在することはない。

他にも増益の用法があることを推測した上で、ここで検討された増益を増益①とする。

増益①

- 形象Xに対し形象Yを与えること。
- 形象Xに対し形象Xを与えることである確定 (niścaya) とともに存在しない。

第 49 偈に関し、もう一つ着目すべき点は、samāropa と āropa の両方が用いられ、かつその用法に区別も見られないという点である。しかし、この偈に対する自注における第 49 偈 ab 句の言い換えでは、āropa の部分が samāropa に置き換えられており、⁽¹⁴⁾ 韻律の都合により samāropa を āropa に変えていることがわかる。第 49 偈の付近では、集中して 14 度も samāropa が用いられているが、⁽¹⁵⁾

āropa は第 49 偈での一度に限られる。これらの samāropa の用法に差異は見られず、āropa もまた samāropa と同様に用いられており、この箇所からは samāropa の特異な用法、および samāropa と āropa の違いも見られない。samāropa と āropa の違いなどの課題の解決は後述にて言及したい。

3.2 増益と思い込みの関係

次に、増益と思い込み (adhyavasāya) の関係を明らかにしていく。ダルマキールティのテキストにおいて、思い込みと増益に関する諸語 (samāropa, āropa, adhyāropa, adhiropa) が関連して用いられる箇所は次の用例ただ一つだけである。

PVSV 58,6-9:

ekasvabhāvarahiteṣv artheṣu tam **adhyāropyot**padyamānām mithyāpratibhāsītivād
akāryakāriṇam api tatkāryakāriṇam ivādhyavasyantīm vastuprthagbhāvamātra-
bījām samānādhyavasāyām mithyābuddhiṃ śrutir janayanty api⁽¹⁶⁾

同一性を欠いている諸々の対象に対し、その〔一つの形象 (= 顕現)] を増益して (adhyāropya) 生じており、錯誤して顕現しているために効果をなすものではないが、そのような〔効果] をなすものであるかのように思い込んでいる、つまり〔同一ではないものに対し] 同一性を思い込んでいる、実在の別異性のみを原因とする錯誤知を語は生じさせるが、

ここでは 4 つある増益の諸語のうち adhyāropa が用いられている。本稿 2. でふれたように、ダルマキールティは現存する著作の中で adhyāropa を 2 回しか用いず、そのうち 1 回がこのアポーハ論箇所のものである。思い込みと増益の語が同じ文脈で使用されるのはこの用例に限られるため、samāropa, āropa, adhiropa が思い込みとともに用いられることは全くない。

思い込みは、効果的作用 (arthakriyā) のないものである分別知における現れ (pratibhāsa) を、効果的作用のある外界対象 (artha) であると捉える働きをもつ⁽¹⁷⁾。本稿 3.1 の用例での、貝に対し銀の形象を増益する場合もそこに錯誤は生じて

いるが、分別知上の現れを實在と思い込む場合の錯誤とは異なるレベルの錯誤と言える。また、貝と銀の例での増益が、「存在しないものを存在するものと認識する行為」であるのに対し、思い込みは、「存在しないものを通じて存在するものを思い浮かべる行為」である。

以上のことから、貝と銀の例での増益と思い込みを同等に捉えることは適切と言えないだろう。そして、思い込みの用例での増益は、思い込みを異なる表現で言い換えたものと考えられるため、貝と銀の例での増益と思い込みの用例での増益とでは異なるレベルの働きをもつと言える。前者が「存在しないものを誤って存在するものと認識すること」という内容に対し、後者を「實在しないものを誤って實在するものと認識すること」と表現することもできよう。異なるレベルではあるが、この表現内容からは後者に対する「増益」という訳語もまた不適切とは言えない。

思い込み、および思い込みの用例での増益は、貝と銀の例での増益とは働きが異なるため、ここでの増益を増益②としたい。

増益②

- 實在に対し形象を与えること。
- 形象を實在と捉える行為である思い込み (adhyavasāya) と同様の働きをもつ。

思い込みと増益②は異なる方向性をもつが、用例からはダルマキールティが「形象を實在と思い込むこと」(思い込み)と「實在に対し形象を増益すること」(増益②)を同等のものと捉えていると考えられる。では、増益①「貝などの形象Xに対し銀などの形象非Xを増益すること」は「銀などの形象非Xを貝などの形象Xと思い込むこと」とすることができるのか。その意味内容としては必ずしも誤りではないかもしれないが、この場合での「思い込み」をダルマキールティの adhyavasāya として捉えることはできない。自注におけるダルマキールティの adhyavasāya⁽¹⁸⁾ の用法と合致しないからである。⁽¹⁹⁾

本稿 3.1 では貝と銀の例での増益を増益①とし、思い込みの例での増益を増益②とした。これら 2 種類の増益を念頭に置き、さらに他の用例の検討へとすすみたい。

3.3 samāropa と āropa

本稿 3.1 では samāropa と āropa が同じ偈の中で使用される用例について考察した。このように samāropa と āropa が同じ文脈などで使用されるパターンは、アポーハ論箇所において他に一箇所のみ存在する⁽²⁰⁾。ここで両語は交互に用いられているが、対論者や定説論者の見解を示す中での用例であるため、必ずしもダルマキールティ自身が異なる用法により使い分けているとは言えないだろう。

このようなダルマキールティ自身の見解とは言えない用例や、すでに検討をした第 49 偈のような偈分での用例を除くと、アポーハ論箇所での samāropa の使用箇所と āropa の使用箇所の分布は、それぞれ samāropa が前半 (PVSV 26, 20-43,6), āropa が後半 (PVSV 43,28-82,19) といったようにきれいに二分される。このことから、ダルマキールティが議論内容に応じて samāropa と āropa を使い分けていることが予想される。

具体的に両語の用例を検討比較していきたい。まず samāropa に関し、samāropa が対象とする語は貝と銀の例での銀や、光と宝石の例での宝石といったものに限定される。つまり、samāropa はすべて「ある形象 X に対し、形象 Y を増益する」という内容を持ち、本稿 3.1 で規定した増益①にあてはまる。では、āropa の用例はどのように分類されるのか。偈文などを除いた場合の、アポーハ論箇所初出の āropa の用例は以下のものである。

PVSV 43,25-29:

upakāryopakāriṇor apy upādhitadvatoḥ sahāvasthānād adoṣa iti cet.

na. niṣpannasya pāratantryābhāvād anupādhitvam. nāniṣpannasya svarūpāsiddheḥ.

sarvathāsāt pāratantryam iti kalpanāropitaṃ kṛtvā vyavahāre sarvathā saiva kiṃ

na buddhir anuvidhīyate.⁽²¹⁾

〔反論：〕付帯条件 (upādhi) とその〔付帯条件〕をもつものは、補助されるものと補助するもの (upakāryopakārin) であるが、ともに確立しているために、過失ではない。

〔答論：過失でないことは〕ない。〔付帯条件をもつものと同時に〕存在しているものは付帯条件ではない。〔付帯条件をもつものと付帯条件との間に〕他依存性 (pāratantrya) はないために。〔また、〕存在していないものが〔他依存性や付帯条件であるということも〕ない。〔存在していないものの〕自体が成立しないゆえに。他依存性は〔存在しているものにも存在していないものにも〕常に存在しないのである。したがって、言語活動において〔他依存性という言語表現は〕分別知により増益され、まさにその〔増益を行う分別〕知が〔他の言語表現の使用を含む〕全ての場合においてどうして依拠されないのか。⁽²²⁾

この用例では付帯条件 (upādhi) と付帯条件をもつものについて、他依存性 (pāratantrya) に言及しながら説かれている。付帯条件と付帯条件をもつもの内容自体は、属性と基体 (dharma, dharmin) の議論に還元されるものであるが、本稿では詳細な言及を避けることとしたい。⁽²³⁾ この「他依存性」は实在論者にとって实在するものであろうが、ダルマキールティにとっては实在ではなく、言語表現におけるものにすぎず、分別知 (kalpanā) により増益 (āropa) されたものに他ならない。そのような言語表現を利用することで認識者は言語活動を行うのである。

ここで āropa は語とその表示対象についての議論で使用されているため、貝と銀の例での増益①や、思い込みの例での増益②とは異なる用法と言える。次に、増益①および増益②が「何が何に対して」増益されているのかを示しているのに対し、ここでの増益は「何が何により」増益されているのが示されている。つまり、異なる視点で表していると言える。本項ではこの増益を増益①および増益②とは区別し、増益③とする。

また、これまで増益①を「存在しないものを誤って存在するものと認識する

こと」, 増益②を「実在しないものを誤って実在するものと認識すること」とし, 「増益」という訳語が適合することを確認してきた。この増益③の例で増益されるものは言語表現であり, その例としてあげられる「他依存性」は「存在しない」(asat)と説かれている。したがって, 「存在しないものを誤って存在するものと認識すること」という内容であると言え, これに関しても「増益」という訳語に問題はないだろう。以上, この言語活動に関連している増益③の働きをまとめると次のようになる。

増益③

- ・言語表現が分別知により生み出されること。

3.4 adhiropa の用法

最後に adhiropa の用法を確認する。本稿 2. の表の通り, この語は他の samāropa, āropa, adhyāropa のようにアポーハ論箇所での用例はなく, 知覚論が説かれる『プラマーナ・ヴァールツェティカ』第3章において名詞と動詞の用例が一つずつあるのみである。これまでの考察はすべて『プラマーナ・ヴァールツェティカ』第1章にあるアポーハ論箇所での用例検討により行ってきたため, adhiropa の用例は背景を異にすることとなる。また, 偈文のみで構成される第3章での使用となるため, すでに検討をした第49偈のように, sam や ā などの動詞接頭辞が省略されていると考えられる場合もあるだろう。adhiropa の意味内容が増益①～③のいずれかにあてはまるのか, あるいはさらに異なるものなのかという確認を行うべきだが, 上記の問題から, 考察は簡潔に行うこととしたい。

PV 3.493:

vicchinne darśane cākṣād avicchinnādhiropaṇam /
nākṣāt sarvākṣabuddhīnām vitathatvaprasaṅgataḥ //

また, 感官による知覚は区切られたものであるので, 「区切られていない」

という増益は感官によるものではない。〔それもまた感官によるものであるならば、〕すべての感官知が錯誤となってしまうゆえに。

感官により得られる知は刹那ごとに区切られたものであり、そのような区切られた知に対し「区切られていない」と増益することは当然錯誤である。つまり、実際には区切られた感官知に対し、「区切られていない」という錯誤知を増益する例と言えるだろう。この偈、およびもう一つの *adhiropa* の用例である第3章379偈は、両者ともに「知が自己認識であること」を説く箇所⁽²⁴⁾に該当し、*adhiropa* もその内容に関連したものと言える。本稿3.1-3で検討した増益①～③と根本的に異なる用法をもつとは言えないまでも、知覚章特有の内容であると言えるだろう。

4. おわりに

以上、ダルマキールティの増益に関連する *samāropa*, *āropa*, *adhyāropa*, *adhiropa* の用法を、アポーハ論箇所の用例を中心に検討することで確認した。

アポーハ論箇所では *samāropa*, *āropa*, *adhyāropa* はそれぞれ異なる文脈において用いられていた。しかし、いずれも「存在しないものを誤って存在するものと認識すること」、あるいは「実在しないものを誤って実在するものと認識すること」と理解することができ、「増益」という訳語は適合していた。

「形象Xに対し形象Yを与えること」である *samāropa* は、「形象Xに対し形象Xを与えること」である確定 (*niścaya*) とともに存在しない (増益①)。*adhyāropa* は思い込み (*adhyavasāya*) と同様の内容を持ち、「実在に対し形象を与えること」であり (増益②)、言語活動に関する議論で用いられていた *āropa* は、「言語表現が分別知により生み出されること」であった (増益③)。このように、*samāropa*, *adhyāropa*, *āropa* にそれぞれ対応する増益①、増益②、増益③とでは議論のレベルが異なっている。

韻律にともなう接頭辞の問題から、*adhiropa* の用例などの韻文の検討は最小限にとどめたが、より厳密な結果を求めるためにはこれらについても詳細に検

討する必要がある。韻文での増益に関連する諸語の分類については、本稿での結論にも基づきながら別稿にて行いたい。

〈略号〉

- AP *Aphaprakarāṇa*. Dharmottara. See Frauwallner 1937.
- MSA (Bh) *Mahāyānasūtrālamkāra (bhāṣya)*. *Exposé de la doctrine du Grand Véhicule selon de Système Yogācāra*. Tome I-II. Ed. Sylvain Lévi. Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1907-1911. Reprint, Kyoto: Rinsen Book, 1983.
- PV 1 *Pramāṇavārttika*, chapter 1. Dharmakīrti. see PVSV.
- PV 3 *Pramāṇavārttika*, chapter 3. Dharmakīrti. see 戸崎 1979, 1985.
- PV₁ *Pramāṇavārttika (thad ma rnam 'grel gyi tshig lehur byas pa)*. Dharmakīrti. See PVSV₁.
- PV_{in} 3 *Pramāṇaviniścaya*, chapter 3. Dharmakīrti. *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Chapter 3*. Ed. Pascale Hugon and Toru Tomabechi. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2011.
- PV_{in} 1 *Pramāṇaviniścayaṭīkā*. Dharmottara. Derge ed. Tohoku No. 4227. Tshad ma, tshad ma, 1b1-178a3. Peking ed, Otani No. 5727. Tshad ma, we 1a1-209b8.
- PV 1 *Pramāṇavārttikaṭīkā (thad ma rnam 'grel gyi 'grel bshad)*. Śākyabuddhi. Derge ed. Tohoku No. 4220. Tshad ma, je 1b1-328a7, nye 1b1-282a7. Peking ed, Otani No. 5718. Tshad ma, je 1a1-402a8 nye 1a1-348a8.
- PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti*. Dharmakīrti. In the *Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti: the First Chapter with the Autocommentary*. Ed. Raniero Gnoli. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960.
- PVSV₁ *Pramāṇavārttikasvavṛtti (thad ma rnam 'grel gyi 'grel pa)*. Dharmakīrti. Derge ed. Tohoku No. 4216. Tshad ma, ce 261b1-365a7. Peking ed, Otani No. 5717. Tshad ma, ce 404b3-535a4.
- PVSV 1 *Pramāṇavārttikasvavṛttiṭīkā*. Karṇakagomin. In *Ācārya-Dharmakīrteḥ Pramāṇavārttikaṃ (svārthānumānaparicchedaḥ) svopajñavṛtṭyā Karṇakagomiviracitayā tatṭīkayā ca sahitam*. Ed. Rāhula Sāṃkrtyāyana. Allahabad: Kitāb Mahal, 1943.

〈参考文献〉

薊法明

2006 「唯識思想における増益と損減について」『印度学仏教学研究』54(2) : 91-95.

2010 「唯識三性説の構造をめぐって」『印度学仏教学研究』58(2) : 119-123.

片岡啓

2012 「アポーハとは何か？」『インド論理学研究』5 : 109-134.

2013 「Dharmottara は Apho 論で何を否定したのか？」『南アジア古典学』8 : 51-73.

桂紹隆

1989 「知覚判断・擬似知覚・世俗知」『藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教』平楽寺書店, 533-553.

戸崎宏正

1979 『仏教認識論の研究』上巻, 大東出版社.

1985 『仏教認識論の研究』下巻, 大東出版社.

中須賀美幸

2014 「ダルマキールティの「付託の排除」論— adhyavasāya, niścaya, 知覚判断の関係をめぐって—」『南アジア古典学』9: 397-418.

秦野貴生

2016 「『プラマーナ・ヴァールティカ』自註における adhyavasāya の位置づけ」『印度学仏教学研究』65(1): 122-125.

2019 「ダルマキールティのアポーハ論における ākṣepa 及び pratikṣepa の考察」『印度学仏教学研究』68(1): 169-173.

福田洋一

2011 「ダルマキールティと anyāpoha」『インド論理学研究』2: 57-71.

Eltschinger, Vincent, John Taber, Michael Torsten Much, and Isabelle Ratié

2018 *Dharmakīrti's Theory of Exclusion (apoha). Part I. On Concealing. An Annotated Translation of Pramāṇavārttikasvavṛtti 24, 16-45, 20 (Pramāṇavārttika 1.40-91)*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

Frauwallner, Erich

1937 "Beiträge zur Apohalehre. II. Dharmottara." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 44: 233-287.

1961 "Landmarks in the history of Indian logic." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, 5: 125-148.

Inami, Masahiro, Kazunobu Matsuda, and Tadashi Tani

1992 *A Study of the Pramāṇavārttikaṭīkā by Śākyabuddhi from the National Archives Collection, Kathmandu. Part I. Sanskrit Fragments Transcribed*. Tokyo: The Toyo Bunko.

Ono, Motoi, Jun Takashima, and Jun'ichi Oda

2020 *KWIC Index to the Sanskrit Texts Dharmakīrti*. Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Sakai, Masamichi and Jun Takashima

2015 *Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya*. Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.

Tanji, Teruyoshi

2000 "On Samāropa." *Wisdom, Compassion, and the Search for Understanding: The Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao*. Ed. by Jonathan Silk. Honolulu: University of Hawaii Press, 347-368.

註

- (1) 中観思想での「増益」, 「損減」の考察については Tanji 2000 を, 同語の唯識思想での考察については薊 2006, 2010 などを参照されたい。
- (2) 『大乘莊嚴經論』(*Mahāyānasūtrālamkāra (bhāṣya)*) では「増益」と「損減」の定義について次のように説かれる。Cf. MSABh 60,20–22 ad MSA XI.23: *abhāvasya hy abhāvātvaṃ viditvā samāropaṃ na karoti. bhāvasya bhāvātvaṃ viditvāpavādaṃ na karoti.* 「非存在が非存在であると認識すれば, 増益をなすことはなく, 存在を存在と認識すれば, 損減をなすことはない。」
- (3) 本稿で扱う仏教論師の年代は Frauwallner 1961 に依拠する。
- (4) 近年の先行研究で *samāropa* は「付託」と訳され, 「増益」との区別も特にはされていないように思われるが, 片岡 (2012, p. 122) では唯識説における有相・無相の観点から, 外的対象の上に内的形象をのせる, あるいは内的形象の上に外界対象性をのせるという意味での *samāropa* を「付託」とし, 無いものを誤ってあるものとするという意味での *samāropa* を「増益」とする区別を提示している。
- (5) 本稿ではダルマキールティにおける *apavāda* の用法についての言及は控える。
- (6) この区別に関し最も言及している先行研究の一つとして片岡 2012 があげられるが, 依然として議論の余地は残ると考えられる。
- (7) ダルマキールティの捉える「思い込み」については秦野 2016 を参照。
- (8) Cf. 中須賀 2014.
- (9) Cf. Ono, Takashima, and Oda 2020 and Sakai and Takashima 2015.
- (10) Cf. PVSV 26,18–20: *tasmāt paśyan śuktirūpaṃ viśiṣṭam eva paśyati. niścayapratyayaivaikalyāt tv anīscinvaṃ tatsāmānyam paśyāmīti manyate. tato 'sya rajatasamāropaḥ.* 「それゆえ, 貝の姿を見る場合, 限定されたもの (= 自相) のみを見ている。しかし, 確定知を欠いているために [貝の姿を] 確定できない場合, 「その [銀の] 普遍を私は見ている」と考える。そのことから, この者に [貝の姿への] 銀の増益がある」
この箇所訳は片岡 (2013, p. 59) なども参照されたい。
- (11) PV, D276b1–3; P422b2–5:
nges pa dang ni sgro 'dogs yid (yid D : yin P) // gnod bya gnod byed ngo bo'i (bo'i D : bor P) phyir // 'di ni sgro 'dogs dben pa la // 'jug ('jug D : mjug P) ces bya bar shes pa yin // 49 //
- (12) Cf. PVSV 28,15–16: *yatra tu pratipattur bhrāntinimittaṃ nāsti tatraivāsya taddarśanāviśeṣe 'pi smārto niścayo bhavati.* 「一方, あるもの [X] に対して, 認識者の錯誤の原因がない場合, その認識が同じであっても, まさにその [X] に対し, 想起された確定 [知] が存在する」
- (13) 本論と直接的には関係のない内容であるが, 増益を排除する (*samāropavyavaccheda*) 議論に関し, 先行研究により見解がやや錯綜している。増益の排除が推理によってなされるということに関しては異論なからうが (cf. PVSV 27,13–15: *yadā punar anumānena samāropavyavacchedaḥ kriyate tadā*

naikasamāropavyavacchedāḥ anyavyavacchedaḥ kṛto bhavātīti tadartham anyat pravartate. 「一方、推理によって増益の排除がなされるとき、そのとき、ある増益の排除によって他の〔増益の〕排除がなされることはない。よって、その〔他の増益の排除の〕ために、他の〔推理が〕働く」、推理がいかなる増益を排除するのかという点で意見が割れているようである。これについて、例えば煙から火を推理するときならば、火以外のものを増益することを推理は排除するのであり (cf. 片岡 (2013, p. 59)), 貝に対してすでに増益された銀性を推理が排除するのではないだろう。貝であることが改めて判明したとしても、そこに推理の *pramāṇa* としての条件である新規情報は存在しないため (cf. 桂 1989), その知は推理とは関係せず、整合性を得たにすぎないと考えべきである。したがって、推理に関する「増益の排除」は、「すでに増益されたものを排除する」と捉えるべきではなく、「これから増益されることを排除する」と捉えるべきである。

- (14) Cf. PVSV 28,16-17: samāropaniścayayor bādhyabādhakabhāvāt.
- (15) Cf. PVSV 26,20-29, 1.
- (16) PVSV₁ D293a7-b1; P443a5-7: ngo bo nyid gcig dang bral ba'i don rnam la de sgro btags nas skye ba'i blo phyin ci log tu snang ba'i phyir bya ba byed pa ma yin yang de byed pa lta bur lhag par zhen pa'i dngos po tha dad pa'i ngo bo tсам gyis sa bon can (can om. P) mtshungs pa nyid du lhag par zhen pa (pa D : par P) phyin ci log pa bskyed pa'i mnyan pa yang
- (17) PVSV 64,23-25: uktaṃ prāg yathā saṃsṛtabāhyādhyātmikabhedā buddhiḥ svam evābhāsam vyavahāraṇiścayam arthakriyāyogyam adhyavasāya śābdārtham upanayātīti. 「例えば、外界と意識内との区別を混合した知は、まさに〔知〕自身に属す現れを、効果能力がある言語表現の対象であると思い込み、語の対象を生じさせると以前に述べられた。」
- (18) Cf. 秦野 2016.
- (19) ダルマキールティの注釈者であるシャーキャブッディとカルナカゴーミンは、ダルマキールティの *adhyavasāya* を *adhyāropa* の他に *samāropa* や *āropa* と置き換えて注釈することがある (cf. Inami, Matsuda, and Tani (1992, p. 7, Ca 7), PVSVT 123,12-13)。これはダルマキールティと注釈者との *adhyavasāya* の捉え方の違いにも起因していると言えるだろう。一方、ダルモツタラ (Dharmottara, ca. 750-810) は彼の著作『アポーハ・プラカラナ』(*Apoḥaprakaraṇa*) の中で、*adhyavasāya* を増益の語 (sgro 'dogs pa) として解釈することを否定している (cf. AP 238,7-22)。以上の議論については片岡 (2013, p. 54-61) も参照されたい。
- (20) Cf. PVSV 50,4-12.
- (21) PVSV₁ D285b4-5; P433b5-7: gal te khyad par dang (dang om. D) de dang ldan pa phan par bya ba dang phan par byed pa dag kyang lhan cig gnas pa'i phyir nyes pa med do zhe na / ma yin te / grub pa la gzhan gyi dbang med pa'i phyir khyad par nyid ma yin no // ma grub pa yang ma yin te / rang gi ngo bor ma red (red D : nges P) pa'i phyir ro // rnam pa thams cad du gzhan gyi dbang nyid med pas rtogs pas sgro gdags par (par D : pa P)

byas nas tha snyad 'dogs na ni thams cad du blo de kho na ci ste mi sbyor /

- (22) Cf. PVT D98b6-7; P116a4-5: thams cad du zhes bya ba mam pa thams cad du ji ltar gzhan gyi dbang nyid du tha snyad gdags pa la blo'i rjes su byed pa bzhin du khyad par dang khyad par gyi gzhir tha snyad gdags pa la yang sgro 'dogs par byed pa'i blo de kho na ji ste mi sbyor /

Cf. PVSVT 187,11-12: sarvatheti sarveṇa prakāreṇa yathā pāratantryavyavahāre buddhir anuvidhīyate tathā viśeṣaṇaviśeṣyavyavahāre saivāropikā buddhiḥ kiṃ nānuvidhīyate.

- (23) ダルマキールティにおける属性と基体の議論については秦野 2019 も参照された
い。

- (24) Cf. 戸崎 (1979, p. 35).